

てくれる国ならどの国でも赴くことができたが、今やナチ宣伝家にとってはパレスティナがユダヤ人問題解決の恰好の出国先となったのである。しかし、ドイツ教育大学のグスタフ・ゲンターがきわめて慎重に注釈していたように、シオニストもなおユダヤ人ということであった。

ロシアは共産主義国家としては我々ナチス国家にとって危険な存在であるが、現在は友好関係を有している。それとちょうど同じように、今後もユダヤ人がつねに我々の敵であり続けることを我々は弁えているが、もし独立国家として彼らが自らを確立すれば、我々のユダヤ人に対する態度は友好的なものになる⁽¹⁴⁾。

もしこれで十分でなければ、子供用の遊び「ユダヤ人出ていけ！」が、ナチスのシオニズム観をあますところなく示して幻想を払拭させるゲームになった。駒は中世ユダヤ人風に棘つき帽子を被せられたポーン、プレーヤーはダイスを振ってポーンを動かす。勝った子供のユダヤ人駒は、まっさきに城壁に囲まれた都市のゲートをくぐって「パレスティナへ向け出発！」と走り出る。そういうゲームである。⁽¹⁵⁾シオニストはナチ・ドイツでは蔑まれたが、彼らが、パレスティナで必要な資本を得たいと望んでいる以上、ナチのパトロネージ(後援)を極度に必要としており、ハーヴァラとそれに続く一連のパレスティナ折衝のすべてが国家レベルの協定成立にきつと導く、と自らに言いよかせたのであった。

「国家の総意が我々の願望と結びついて彼らを導くのだ」

一九三四年には、親衛隊がナチ党内でいちばん親シオニズム分子になっていた。他のナチスは、ユダヤ人への親衛隊の対応を見て「ソフト(柔軟)」という言い方さえした。フォン・ミルデンシュタイン男爵が六カ月間のパレスティナ訪問を終えてドイツに帰ってきたときには熱烈なシオニスト・シンパになっていた。親衛隊保安部(SD-親衛隊情報組織)のユダヤ人問題課の課長として、このミルデンシュタインは今やヘブライ語を学びはじめ、ヘブライ語のレコードを蒐集しはじめた。かつての旅の道連れで彼のガイドもつとめたクルト・トゥーフラがミルデンシュタインの職場を訪れた時には、聞き慣れたユダヤ民謡のメロディーによって迎えられたほどであった。⁽¹⁶⁾部屋にはシオニストの数の急増ぶりを示すドイツの国内地図も掲げられていた。⁽¹⁷⁾フォン・ミルデンシュタインは約束を守る男であった。パレスティナの入植地で見聞したことすべてを好意的に書いて紹介しただけでなく、ゲッベルスを説得してこのナチ党一のプロパガンダ・リーダーの主宰する宣伝機関紙『アングリフ(攻撃)』にも(一九三四年九月二六日から一〇月九日まで)堂々二二回にわたる報告シリーズを掲載させた。パレスティナにおけるシオニストたちの下での滞在は、この親衛隊隊員ミルデンシュタインに「世界を何世紀の間苦しめた傷、ユダヤ人問題を癒すための唯一の方法」を教えたのだった。よきユダヤ人のその足下にある一定の大地(ポーデン)がユダヤ人にどんなに生気を吹き込んだかはまさに驚嘆に値した。「大地は一〇年のうちにユダヤ人を革新しユダヤ人のあり方を改善した。この新しいユダヤ人は新しい民族になるであろう」⁽¹⁸⁾このミルデンシュタインの旅を記念してゲッベルスは、表が鍵十字、裏がシオニストの星というメダルをつくらせた。⁽¹⁹⁾

一九三五年五月、当時親衛隊保安部長で、後に悪名高いチェコ(ボヘミア・モラヴィア保護領)「総督代